東山代小学校6年生 川内野区と交流授業

1月19日、東山代小学校で、6年生児童と川内野区の住民との交流授業がありました。

この日は、川内野区の住民と地域おこし協力隊の6人が講師となって、6年生58人に、住民が育てたコキア（和名ホウキギ）を材料にしたほうき作りを指導。川内野区では、令和3年からコキアの栽培を始め、昨年は千本を栽培しました。11月には、コキアが真っ赤に染まり、畑一面の鮮やかな光景が、観光客を喜ばせていました。

ほうきを完成させた児童は、「新しい経験ができた。『作る』ということを考える授業だった」と話し、児童たちは、自然にあるものを生かす知恵を学びました。

↑初めてのほうき作りは真剣そのもの

みんなで考えよう 人権・同和問題 No. 263

このコーナーは、隔月のシリーズで掲載しています。これを手がかりに、家庭で人権・同和問題について話し合ってみましょう。

鬼退治

●**問合先** 生涯学習課人権・同和教育係（☎23-3186）

「やりましょう、やりましょう、これから鬼の征伐に、ついて行くならやりましょう」童謡『桃太郎』の一節です。桃太郎が仲間たちと、鬼ヶ島へ鬼退治に出発する勇ましい様子が歌われています。

ところで、『鬼ヶ島』はどこにあるのでしょうか。はたまた、『鬼』の正体とは。古今東西、諸説あるようですが、ここでは、『人権』というフィルターを通して、考えてみたいと思います。

恐るべき存在でありながら、言葉や遊びなど、私たちの日常に溶け込んでいる鬼。その姿は、ふだんは心の奥に潜んでいて、誰かをいじめたり、ばかにしたり、仲間外しにしようとする負の感情が、心を支配したときに暴れ出す『もう一人の嫌な自分』と似ている気がします。

このことを踏まえると、鬼ヶ島は私たちの心の中にあり、鬼の正体は、人の弱さが生み出す『差別心』と言えるのではないでしょうか。一刻も早く、退治しなくてはいけません。

鬼退治というと、身がすくみ、何もできそうもない諦めの気持ちになってしまいますが、暴れ出さないように閉じ込めることならできるかもしれません。まずは、「自分も差別をするかもしれない」と、自分の心の中にも鬼が潜んでいることを認めることから始めてみましょう。そのうえで、目を背けたくなる自分の中の鬼と正面から向き合うことで、「こんな自分は見たくない」と、鬼を閉じ込めるための『砦』を心の中に築くことができるはずです。

自分を見つめましょう。それが自分**にも**できることであり、自分**にしか**できない、差別をなくすための大きな一歩になるのです。

郷土の文化財

伊万里・鍋島ギャラリーの名宝⑪

●**問合先** 生涯学習課歴史民俗資料館（☎22-7107）

染付竹葉文皿（鍋島焼）

今月は、染付竹葉文皿を紹介します。1700～1730年代に作られた鍋島焼です。

器形は内ぐりが深く、高台が高い、木盃形をした盛期鍋島の作品です。直径は、29・6センチの尺皿です。

竹葉を2本ごとに結わえた文様を五方割、すなわち星形に配しています。奇数割に文様を配するのは、難易度が高いデザインです。

竹は、寒い季節にも緑色を失わないことから、鍋島焼ではよく用いられる、めでたい文様の一つです。

鍋島焼の七寸皿、五寸皿、三寸皿は、組み物として、20枚単位で作られていました。一方、尺皿は一点もので作られたため、盛期鍋島では、同時代の同じ図柄の作品は知られていません。

黄色と緑色の2色の上絵の具を用いた、同じ図柄の中期鍋島の作品が、有田町の今右衛門古陶磁美術館に所蔵されています。

裏文様は、染付で描かれた牡丹唐草文を三方に配し、高台には、七宝文をめぐらしています。

デザイン感覚に優れた鍋島焼の名品です。

●伊万里・鍋島ギャラリー

※入館料は無料です。

（☎22-2267）

→染付竹葉文皿